

学生の LLC 利用状況と 自律学習者育成に向けた開室 10 年の取り組み*

橘 未都

教務部 Language Learning Center
(2022 年 11 月 30 日)

LLC Usage among Students and Challenges over Ten Years

Misato Tachibana
Faculty of Academic Affairs, Language Learning Center

Abstract

Language Learning Center (LLC) was founded at the Osaka Institute of Technology over ten years ago. Since then, LLC has faced many challenges and tried a variety of classes and services to foster autonomous learners. To clarify effective approaches toward students at the engineering university, we evaluated our services based on students' usage.

When the speaking program was introduced, the number of students using a consultation room increased. Running free conversations on the second floor where almost all services in the LLC are held brought three times more students to this activity. These increases indicated two points; First, providing learning resources for students to simply follow their progress through activities enhances their motivation and second, creating a community brings regular users to services.

キーワード;自律学習支援施設, ラーナー オートノミー, ニーズ, 英語

Keywords; Self-Access Learning Center, SALC, Autonomous Learners, needs, English

* 2019 年 The Japan Association for Self-Access Learning Annual Conference にて発表(2019 年 11 月 30 日, 追手門学院大学)

【緒言】

Self-Access learning Center (SALC)

Self-Access learning Center, SALC と呼ばれる自律学習支援の場は日本の大学では 2000 年以降に開設され¹⁾, JASAL (The Japan Association for Self-Access Learning: 日本自律学習学会)によると, 現在日本には 57 の施設が存在する. そして, 各大学における SALC は大学の規模や学生数, 学部の種類, 授業と連携の有無など, 大学でのニーズに応じてその運営形態はさまざまである.

もともと SALC はヨーロッパの自律的な学習を取り巻く議論の中で発達し, 海外では 1960 年頃から, 学生が必要な時に必要な学習リソースを活用できる場として開設された. 日本ではまだ歴史の浅い SALC ではあるが, ヨーロッパでは開設されてから約 60 年が経ち, 実は Reinders²⁾が「SALC は終わりが来たのか?」と警告を鳴らしたように, SALC は現在転換期を迎えている. なぜなら, 世界中で設立された何千の SALC は目に見える物質的な要素を機械的にまねただけにすぎないからである³⁾. そして, 設立当初は紙媒体の学習法が主流であったが, テクノロジーが進化しオンラインやアプリを活用した学習法へと移り変わっていったように, 学生のニーズも 1960 年代とは異なる可能性も高い. 設立当初と同様の手法を進化させ, 新たな役割を担う転換期に SALC あるといえる³⁾.

Language Learning Center (LLC)

Language Learning Center (以後 LLC) は大阪工業大学ならびに神田外語大学との連携協定に基づき, 「神田外語大学の提供する特色のある英語教育プログラムなどの受講を通して, 学生の国際学会での発表や海外の大学との研究交流などにも対応できるグローバル人材を育成すること」を目的し, 2012 年度より連携事業としてスタートした. 設立当初, LLC は Chast 2 階フロアにて English only のもと運営

を行っていた. 施設には, Multi Purpose Room (多目的室) が 2 部屋, 授業や会議での使用を目的とした Presentation Room, DVD 鑑賞やくつろいで歓談できる Lounge Area などが設けられ, 学生が用途に合わせて活用できるようにデザインされていた. LLC 運営の要となる教員は External Language Consultancy Centre (以下: ELCC) 所属教員 3 名が神田外語大学より本学に派遣された. 外国人教員の在室時間は, 原則として授業期間 (試験期間を含む) の月～金曜日の 9:00～19:00 であった. そして, LLC において大阪工業大学大学院学生や学部学生を対象に, 英語自習環境の向上と指導を実施すべく, 大学院正課英語授業や課外英語授業, Consultation Room (以下: CR, 1 対 1 の 1 回 15 分の英会話サービス) を設立当初は提供していた.

2012 年に開室してから, 今年で LLC は 11 年目となる. 多くの学生が利用し, 学生の英語力の底上げに尽力してきた LLC ではあるが, 全てが成功裏に運営できたわけではない. グローバル化に伴う変化や, コロナ禍による影響など, 様々な要因で学生のニーズも変化してきた. それに伴い, LLC にて提供するサービスも臨機応変に対応してきた. そこで本論文では, 更なる活発な利用を目指してこれまでの LLC の学生の利用状況と LLC が提供したサービスを包括的に検討することにした.

【目的】

本論文の目的は, 2012 年から 2021 年までの大宮キャンパスにおける LLC の利用者数や各サービスの利用者数および開講率と LLC で提供したサービスや授業を包括的に検討し, 本学における学生の英語の自律学習に対するニーズを再考することである.

【方法】

LLC では定例報告会を年に数回設けており, その報告会にてその年度の LLC の利用者数や提供して

いるサービスなどを報告する。本論文では定例報告会にて報告されたデータをもとに、検討を行った。

CR および LA の開講率は実際に学生がサービスを利用した総数(実施回数)から開講予定として設けていたサービスの総数(提供予定数)を除いて算出した。

LLC にて開講したサービスおよび授業

LLC にて開講したサービスや授業の概要を以下に示す。Consultation Room, Free Conversation, 外国語特論, Academic English for Researchers, Study Abroad, および PBL Preparation は英語にて進められるサービスまたは授業である。TOEIC Tips は日本語で進められる授業であり, Learning Advising は学生の英語の習得状況および相談内容に合わせて日本語と英語が臨機応変に使い分けられているサービスである。

サービス(要事前予約)

- ・ Consultation Room(以下 CR)
1対1で1回15分の英会話を中心としたサービスである。英会話の練習プログラムとして LLC では, Speaking Program を取り入れている。Speaking Program とは CEFR-J に基づいた, 英会話練習教材である。レベルは4段階に分けられ, それぞれ 10 の課題が存在する。個々の英会話レベルは会話を通じて LLC 教員が判断し, 学生は一つ課題を終了することに, 発音や文法などのフィードバックを受けることができる。1つのレベルの課題が完了すると, 次のレベルへ進むためのテストを受け, 学生は個々のレベルとペースに合わせて取り組むことができる。また, 英語に関することであれば, 英文論文の校閲やプレゼンテーション練習を行う等, 学生のニーズに合わせた対応を CR では実施している。
- ・ Learning Advising(以下 LA)

日本人教員による 1対1の1回20分で実施される, 個々の習熟度に応じた英語の学習方法を相談することのできるサービスである。英語学習法の相談のみならず, 英語力に不安のある学生を対象とした英会話も LA では実施しており, 外国人教員と英語で話すことに不安のある学生の橋渡しの役割を担っている。

サービス(事前予約不要)

- ・ Free Conversation(以下 FC)
お昼休みを含め月曜日から金曜日に毎日 90 分間実施しているグループ英会話である。事前に予約する必要や, 必ずしも 90 分参加する必要もなく, 学生が参加する時間を自身で決めることができる。英会話の内容は日々の生活に関する簡単な日常英会話や, ゲームを通じた視覚的にも理解しやすい英語など様々な方法で運営されるサービスである。

授業(単位認定有)

- ・ 外国語特論
大学院の1回生を対象とした, 英語でのプレゼンテーションの技術・能力の向上および英語 4 技能(読む・書く・聞く・話す)を統合的に向上させることを目的とした講座である。

授業(単位認定無)

- ・ Academic English for Researchers (AER)
大学院進学予定の学部4回生を対象とした, 英語でのポスタープレゼンテーションを学ぶ講座である。
- ・ TOEIC Tips Course (TOEIC 準備講座)
初めて TOEIC を受験するまたは, TOEIC の点数が 300 点から 400 点台の学生を対象とした, TOEIC とは何か, またその勉強法を学ぶ講座である。
- ・ Study Abroad Preparation Course (留学準備講座)
留学予定の学生を対象とした, 留学の際に役立つ英会話を身に着けることを目的とした講

座である。

- ・ PBL Preparation Course (PBL 準備講座)
国際 PBL 参加予定の学生を対象とした、グループワークを通して英会話力を身に付けることを目的とした講座である。

【結果】

Consultation Room 開講率

CR は開講数が年度や週によって異なるため、利用人数ではなく、CR の開講数と開講率で示す (Fig.1)。年度ごとの CR 提供回数および開講率はそれぞれ、2012 年度は総提供回数 1314 回(前期 684 回, 後期 630 回), 開講率 78.1%(前期 81.4%, 後期 74.9%), 2013 年度は総提供回数 1145 回(前期 673 回, 後期 472 回), 開講率 84.9%(前期 93.1%, 後期 76.8%), 2014 年度は総提供回数 1541 回(前期 795 回, 後期 746 回), 開講率 77.1%(前期 86.8%, 後期 67.3%), 2015 年度は総提供回数 1437 回(前期 705 回, 後期 732 回), 開講率 90.8%(前期 88.7%, 後期 92.8%), 2016 年度は総提供回数 1350 回(前期 672 回, 後期 678 回), 開講率 79.6%(前期 93.5%, 後期 65.8%), 2017 年度は総提供回数 1354 回(前期 740 回, 後期 614 回), 開講率 86.6%(前期 90.0%, 後期

83.1%), 2018 年度は総提供回数 1896 回(前期 949 回, 後期 920 回), 開講率 72.3%(前期 72.7%, 後期 72.0%), 2019 年度は総提供回数 1296 回(前期 696 回, 後期 600 回), 開講率 87.6%(前期 88.2%, 後期 87.0%), 2020 年度は総提供回数 2597 回(前期 1330 回, 後期 1267 回), 開講率 22.7%(前期 22.6%, 後期 22.9%), 2021 年度は総提供回数 1741 回(前期 951 回, 後期 790 回), 開講率 64.9%(前期 64.5%, 後期 65.3%)であった。ただし、2020 年度はオンラインで実施した。2021 年度においても計 435 回(前期 324 回, 後期 111 回)はオンラインにて実施し、オンライン時の開講率は計 60.3%(前期 57.6%, 後期 62.9%)であった。2021 年度の対面時の開講率は 69.6%(前期 71.4%, 後期 67.7%)であった。

Leaning Advising 利用者数

2021 年度に提供された LA は全 78 回(前期 60 回, 後期 18 回)であり、開講率は 70%(前期 90%, 後期 50%)であった。2020 年度から提供が開始となった LA ではあったが、コロナの影響により LA もオンラインでの実施であり、1対1のサービスであったことから、実施回数および開講率は CR に含まれた。

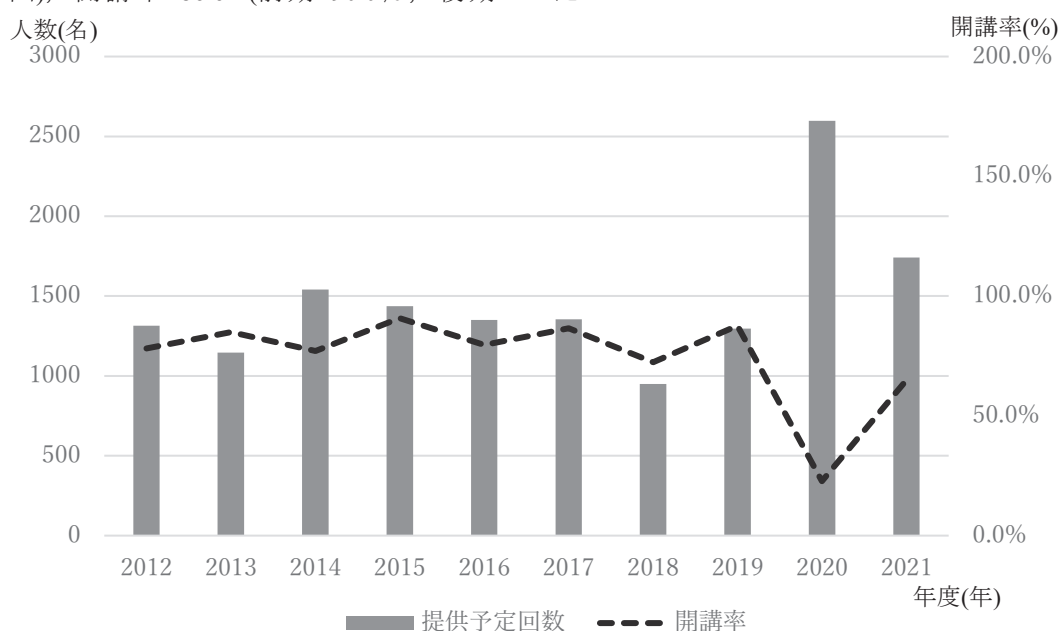


Fig.1 CR 提供予定回数およびその開講率

Free Conversation 利用者数

FC は 2014 年度より提供が開始されたサービスであるため、Fig.2 に 2014 年度以降の利用者数を示す。年度ごとの利用者数は 2014 年度 528 名(前期 296 名, 後期 232 名), 2015 年度 589 名(前期 264 名, 後期 325 名), 2016 年度 963 名(前期 693 名, 後期 270 名), 2017 年度 413 名(前期 203 名, 後期 210 名), 2018 年度 414 名(前期 124 名, 後期 290 名), 2019 年度 1274 名(前期 848 名, 後期 426 名), 2020 年度 116 名(前期 0 名, 後期 116 名), 2021 年度 549 名(前期 287 名, 後期 262 名)であった。ただし、2020 年度の FC は、前期はコロナのため提供が中止となり、後期はオンラインでの実施であった。

総利用者数

LLC の 2012 年度から 2021 年度までの総利用者数の推移を Fig.3 に示す。年度ごとの総利用者数は、それぞれ 2012 年度 3801 名(前期 2118 名, 後期 1683 名), 2013 年度 3741 名(前期 2275 名, 後期 1466 名), 2014 年度 3522 名(前期 2224 名, 後期 1298 名), 2015 年度 3754 名(前期 2446 名, 後期 1308 名), 2016 年度

3153 名(前期 2001 名, 後期 1152 名), 2017 年度 3564 名(前期 2139 名, 後期 1425 名), 2018 年度 3404 名(前期 1918 名, 後期 1486 名), 2019 年度 3782 名(前期 2383 名, 後期 1399 名), 2020 年度 263 名(前期 51 名, 後期 212 名), 2021 年度 2687 名(前期 1292 名, 後期 1395 名)であった。

年度ごとの特筆事項とサービスおよび授業の実施内容

2012 年度から 2021 年度に実施したサービスや授業を Table.1 に示す。2012 年度の特筆事項は、自律学習支援施設として LLC が開室し、当初は English Only のポリシーの基、運営されたことである。2013 年度は Moc International Conference(模擬国際学会)参加学生への英語プレゼンテーションのサポートを本格化し、FD フォーラム終了後に教員を対象に LLC 説明会を実施した。教員対象に実施していた CR は、学生の CR 利用増加に伴い前期で終了した。2014 年度は変化の多い年度であった。教員の数がこれまでの 3 名から 4 名になったこと、Chast 3 階が新たに LLC フロアとなったこと、FC が新たなサービスとして加わり、学生スタッフの定期的な研

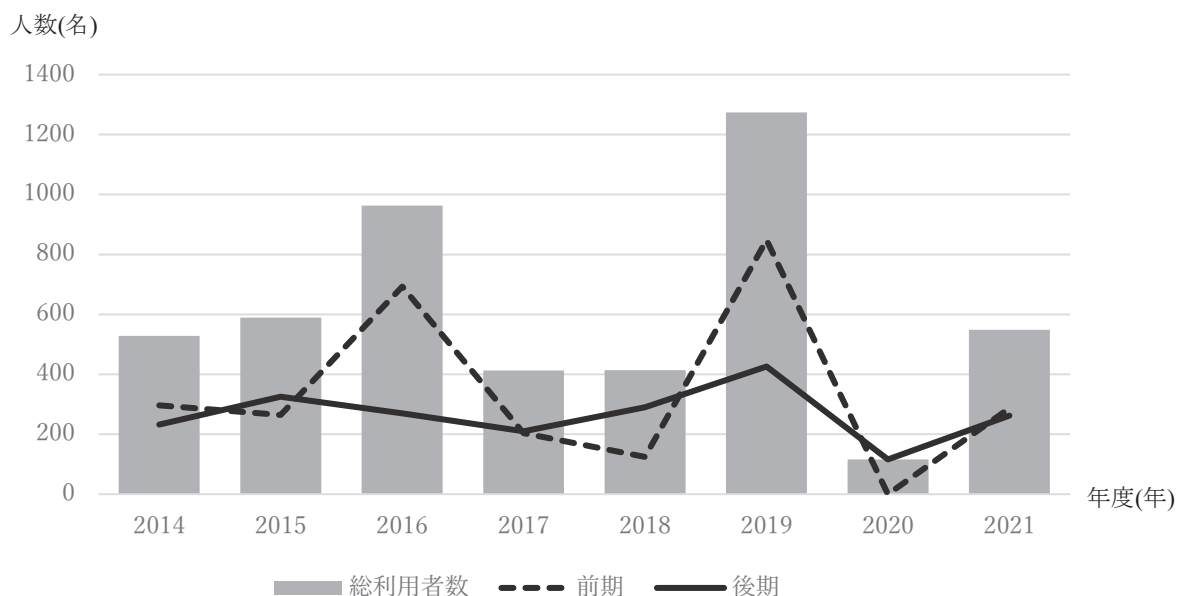


Fig.2 FC 利用者数

修が実施されるようになったことである。2015年度はCRにてSpeaking Programが導入され、Chast 1階ラウンジスペースがLLCの一部となり、FCが1階で開催されるようになった。また、LLC図書のエレクトロニクスシステムが完成し、運用を開始した。2016年度は本学の教職員を対象とした英語授業を再開し、新たな取り組みとしてLLC extra creditプログラムを開始した。LLC extra creditプログラムとはFCに参加することで、1回生の英語授業に加点される仕組みのことである。2017年度はFCの開講回数を週5回から週3回へと削減し

たが、新たにPBL準備講座を開講した。2018年度は教員数が4名から3名へと減少したが、FCの開講回数を週5回へと変更した。2019年度はFCの開催場所をChast 1階から2階へと変更し、新たな取り組みとしてTOEIC準備講座を開講した。2020年度は教員が新たに1名加わり再び4人態勢となったが、コロナによりFCは中止となりCRおよびLAはオンラインでの実施となった。2021年度においては、サービスは対面およびオンラインでの両手段を用いて実施し、授業は対面で実施した。

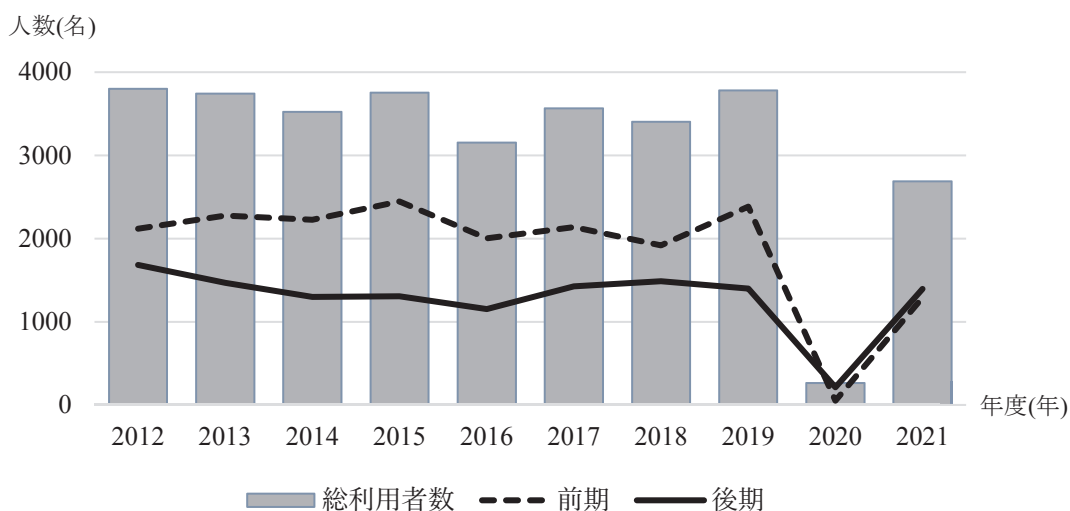


Fig.3 LLC利用者数

年度	サービス			授業				
	CR	LA	FC	外国語特論	AER	TOEIC準備講座	留学準備講座	PBL準備講座
2012	○			○				
2013	○			○	○			
2014	○		○	○	○		○	
2015	○		○	○	○		○	
2016	○		○	○	○		○	
2017	○		○	○	○		○	○
2018	○		○	○	○		○	○
2019	○		○	○	○	○	○	○
2020	○	○	○	○	○	○	○	○
2021	○	○	○	○	○	○	○	○

Table.1 2012年度から2021年度に実施したサービスおよび授業

【考察】

本論文は、本学における学生の英語の自律学習に対するニーズを再考することを目的とし、LLC の利用者数や各サービスの利用状況と LLC で提供したサービス内容や授業を検討した。SALC が転換期にあるといわれるように、これまでの研究でも本論文と同様に、学生のニーズを再考した報告は⁴⁾存在するが、外国語を専攻している学生を対象としており、本学のような理系学部の学生を主の対象とした報告は見つかっていない。また、これまで LLC は学生の受講や利用状況に対応し、様々なサービスを少しずつ変化させながら提供してきた。成功裏に実施できたサービスや授業もあれば、目標とした利用者数を獲得できないサービスや授業もあった。10年に渡る利用状況や提供サービスを包括的に振り返り、学生のニーズを再考する本論文は、今後の LLC の運営において重要な意味を持つ。

CRは2020年度と2021年度のコロナの影響を受けた年度以外は好調な開講率であった。初年度から多くの学生が利用し、その開講率を2019年度まで維持できていたことから、学生にとって1対1での英会話は最も取り組みやすい自律学習であることが示される。しかし、前期と比較すると後期の開講率は2012年度6.5%、2013年度16.3%、2014年度19.5%と大きく減少していた。後期に向けて授業内容が高度になり、またそれぞれの専攻における課題が増えると英語に対するモチベーションが減少する⁵⁾ことが要因であると考えられる。CRを利用する学生の多くは英会話力の向上を目指していた。しかし、一朝一夕で英語力は向上しないことに加え、一回15分のCRのみでは、学生が自身の成長を認識しづらい。また、第二言語で15分間教員とランダムな話題に関して会話を続けることは、英語を苦手とする学生にとっては、この15分が長い時間を感じられ利用自体がストレスとなったかもしれない。これらの課題を解決すべく、2015年度よりSpeaking Programが導入された。導入

後は後期の開講率も92.8%になるなど大きく増加した。学生はCR利用前に15分ほどの事前準備を必要とするが、事前に会話の内容を把握でき、表現したい英語を準備しておくことができる。そして、課題を1つ完了するごとに達成感を感じられ、次のレベルに進む際には自身の成長を認識することが出来る⁵⁾。大学生生活の忙しく、限られた時間の中で英語の自律学習に臨むには、Speaking Programのような既に内容が構築され、成長を学生自身が可視化できる課題を提供することの有用性が示唆された。

LAに関しては2020年度より提供開始されたまだ新しいサービスであるため、サービス自体の利用状況を考察することは難しい。しかし、コロナ禍の中で提供が開始されたサービスが2年目には順調な利用者数を獲得していることから、英語学習に対する意識のある学生は留学が出来ない状況においても一定数いることが示された。

FCは試行錯誤を尽くしたサービスであった。提供を開始した当初はFCをChast 3階で実施し、ゲームや多読本などのテーマをあらかじめ設定し運営していた。しかし、開催場所が3階に位置していたため、FCの様子が実際に参加するまで確認することが難しく、英語の苦手な学生にとっては敷居の高いサービスとなってしまうていた。そこで、翌年にはFCの提供場所をChast 1階での開催へと変更したが、利用者は若干増加しただけであった。テーマを定めることで、一分の学生の興味しか得られなかったと考え翌年には曜日ごとのテーマを廃止した。FCに対する学生の興味を得るために2016年度には新たな取り組みとして、英語の授業と連携しFCを利用すると英語の授業に点数が幾分か加算される仕組みを取り入れた。その結果、利用者数は増加したが、英会話を目的とした学生ではなく点数獲得を目的とした学生の占める割合が増え、英会話が成り立たない状況になってしまった。そのため、翌年にはFCに参加することでのextra creditは廃止した。2017年

度および 2018 年度は、本来の英会話を目的とした学生を対象に Chast 1 階で FC を実施し、曜日ごとのテーマも廃止したが、利用学生数は残念ながら減少した。1 階での開催は Chast がガラス張りの建物であることから、人の目を引きやすかったのは利点ではあったが、参加学生は時に見世物のように感じてしまう⁶⁾こともあったことが原因だったと考える。2019 年度は初めて 2 階で FC を開催した。その結果、利用者数は前年度の約 3 倍に増加した。2020 年度はコロナで提供できず、2021 年度は FC を提供はしているものの、2019 年度のような賑わいは取り戻せていない。コロナ前までは、FC をお昼休みに実施していることから参加中の飲食を許可していたのだが、2021 年はコロナのため飲食禁止とせざるを得なかった。そのため、FC に参加すると学生は十分に昼食の時間を確保できなくなり、参加できなくなる学生がでてしまった。2019 年度の FC に最も多くの利用者が参加したことから、事前に話題を設定せず、Chast 2 階で実施することが学生の FC 参加への意欲をもたらすことが示された。また、2 階で実施したことで、他のサービスを利用する学生の存在を感じ、また外からの視線も気にすることなく参加することが可能になった。いわゆる「参加しやすい雰囲気」を作り出すのに 2019 年度は FC 開始以降初めて成功したといえる。このことから参加学生の性格や教員の運営方法の大切さに加え、参加する施設の環境の重要性が 8 年間の FC を通じて明らかとなった⁶⁾。また、気軽に何度も参加できるということは、FC が一種のコミュニティとして機能していることを示唆する。学生は友人作りなども目的として SALC を利用すること^{7,8)}があるため、2019 年度の FC は成功裏に終了したといえる。

関谷らによると、成果を上げている SALC は、①学習リソース（印刷教材、マルチメディア教材、オンライン教材など）、②個別学習エリア、③グループワーク用エリア、④学習支援デスク、⑤アド

バイジング・サービス、⑥ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート、⑦学習法などについてのワークショップや催しのプログラム、⑧学習者ができるだけ自然な環境で言語を使える機会、⑨コミュニティを形成する場を備えている⁹⁾。これらの要素の中で、LLC はこの 10 年、学習リソースや学習エリアなどの物理的な要素は常に満たされていた。しかし、アドバイジング・サービスや自然な環境で英語を使える機会などの人的要因によって左右される要素は、年度によって提供に差があった。2012 年および 2013 年度は、English Speaking Society(以下 ESS)と呼ばれる、英会話を目的とした学生のサークルが活発に LLC を利用していた。そのため、FC は提供されていなかったが、自然と学生が集まり英語を使うことの出来るコミュニティが出来上がっていた。しかし、ESS の主としたメンバーが卒業すると、徐々にコミュニティは衰退していった。開始当初の FC が学生にとって「参加しやすい雰囲気」でなかったこと、Study Abroad も参加学生数が少なく単位が発生しない授業であったことでモチベーションを維持するのが難しかったことが影響して、2014 年度の利用者が約 200 名減少したと考える。2015 年度は前述した Speaking Program の影響により CR の開講率が上がり LLC の利用者数も回復した。しかし、2016 年度は再び利用者数が減少した。Extra credit 以外の新たな取り組みを行っていなかったため、前年度に LLC の有用性を見いだせなかった学生が再度利用することはなかった可能性が高い。2017 年度は PBL 準備講座を開講し、2015 年度の利用者数には及ばなかったが、400 名ほどの回復が見られた。宝来らが述べるように、同じ手法を用いても同じ結果は出ない¹⁰⁾。このことは、成功裏に進んでいるサービスも常に学生のニーズを敏感に察知し変化させていく必要性を示した。2018 年度は教員の数が減少したが、FC を週 3 日から 5 日へと増加した。参加日へ

の選択肢が増えたことで、梅田キャンパスが開校し大宮キャンパスの学生が大幅に減少したにも関わらず、LLC 利用者数は 100 人減にとどまることができた。2019 年度は FC の開催場所が Chast 2 階へと移し「コミュニティを形成する場」が生まれ、TOEIC 準備講座を開講したことで、新たな「学習法などについてのワークショップ や催しのプログラム」が実行された。学生の心理的なニーズのみならず、現実的なニーズを満たすことが出来たため 2019 年度の LLC は活発に機能したと考える。残念ながら、コロナによって失った活気は 2021 年度には戻ってきていない。with コロナのもと LLC を運営するために、新たな手法を取り入れる時期であるといえる。

今後の課題

本論文は、年度ごとの利用者数や利用状況にのみ着目しており、1 人の学生が LLC を利用する頻度やどのように活用しているかなど詳細な調査は実施していない。そのため、LLC を利用した学生が自身の自律学習を確立できたかは定かではない。より学生のニーズを満たし自律学習を促すために、サービスの質に着目した検討も今後は行っていきたい。

また、コロナの影響によりオンラインを活用したサービスも実施したが、残念ながら活発な活用は認められなかった。テクノロジーが進むにつれオンラインを活用した自律学習のニーズは増す可能性が期待されるので、コロナ禍で実施したオンラインサービスを分析し、オンラインでも活発に活用できる教材作成にむけた基盤を築く必要がある。

まとめ

LLC が開室してから 10 年間の利用状況および提供したサービスや実施した授業を包括的に振り返り、本学の学生における英語の自律学習に対するニーズを再考した。その結果、学生の活発な利用を促し、自律学習を構築するためには、①提供しているサー

ビスを通じて LLC 内にコミュニティを形成すること、②学生自身が容易に自身の英語力の向上を確認できる教材を活用することが最も重要であると示された。

【引用文献】

1. Mynard J., *Self-access in Japan*. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 7(4): p. 331-340, 2016.
2. Reinders H., *The end of self-access? English Language Teaching World Online: Voices from the Classroom*.
<https://www.researchgate.net/publication/261673355>, 2012.
3. 瀬井陽, *これからの SALC (Self-Access Learning Center) の意義と課題*. 多文化社会と留学生交流: 大阪大学国際教育交流センター研究論集, 24: p. 19-25, 2020.
4. Mynard J., *Looking backwards and forwards: Evaluating a 15-year-old SALC for continued growth*. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 7(4): p. 427-436, 2016.
5. Worth, A., Moore A., *CEFR-J based speaking program for a self-access learning center*. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 8(1): p. 44-59. 2017.
6. Christopher M. C., Tachibana M, Eades J., Worth, A., *From Zero to Hero: The Story of a Free Conversation Service*. *The Japan Association for Self-Access Learning Journal* (1): p. 129-138. 2020.
7. Murray G., Fujishima N., Uzuka M. *The semiotics of place: Autonomy and space*. In *Social dimensions of autonomy in language learning*. Palgrave Macmillan. p. 81-99, 2014.
8. Yamamoto K., Imamura Y., *Developing learner autonomy through dialogue: Considering social learning opportunities in self-access centers*. in *Navigating foreign language learner autonomy*.

Candlin & Mynard e Publishing. p. 348- 374, 2020.

9. 関谷 Maynard J., Cooker L., *学習者の自律を支援するセルフアクセス学習. 成長する英語学習者*,大修館, . 2010.
10. 宝来 華代子, 木下 陽子, *自律学修者育成へ向けてのSALCの取り組み 2010年設立からの軌跡*. 崇城大学紀要, (44): p. 135—144, 2019.